

奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句

令和七年十一月度 入賞句一覧

投句数 六百三十二句

一般の部

特選

一匹と一人のベンチ鳥渡る

東京都新宿区

花澤 ちいこ

犬をつれての散歩の途中、ベンチで休む。犬をなでながら犬に話し、息を整える。ふと見上げた空を鳥が渡っていく。なにげない日常の一シン。渡る鳥を見上げながら、作者は何を思つたんだろうか。日々の充足感だろうか。これまでの人生のことか、いやこれから先のことか。かすかな孤独感がそこには漂う感がある。西空に消えていく鳥の列は、読者にもいろいろな思いをさそう。

ダム底の村や橡の実降りしきる

大垣市

小林 研

「徳山ダムの完成したのは、計画から五十一年後の2008年。466戸あつた村はダムの底に。山には橡の木が生い茂る。冬にはこの橡の実で、どこの家でも橡餅がつくられた。橡餅にするまでは、何日も川で橡の実を晒さなければならぬといふ。だが今、この橡餅はなかなか手に入らない。父のもとに贈られてきた橡餅の味は懐かしい。降りしきる橡の実は、地を屋根に打つただろう。句はその音を感じさせる。」

野仏に千の風音曼珠沙華

愛媛県松山市

平野 ヒサエ

「野仏に吹く風」は、どんな風なのだろう。風は、川の音、山の音、鳥の声、子ども、人々の声をはこぶ。いやもつと古くからそこには生き、死んでいつた人の声をよぶ。そう、群れ咲く曼珠沙華は、死者たちであり、風音はその声なのだ。野仏と曼珠沙華は、幾分つきすぎといふ。千の風音と曼珠沙華、絶妙でもある。「千の風になつて」という歌がふと出た。

秀逸

秋風や土器の真中の穴まどか

岐阜市

伊藤 をさむ

ラケット背に走る自転車星月夜

大垣市

種田 美弥子

漢藥の分銅ゆれる冬隣

大垣市

白井 秀子

鴨着水水面の夕日広げけり

岐阜市

浅野 翔泉

朝刊の届く音あり咳のあり

東京都世田谷区

関戸 信治

菊人形話しかければ香が流る

大垣市

香田 末代

分數はちよつぴり苦手西瓜切る

東京都足立区

山崎 董久

秋の声してをり木橋一步づつ

三重県津市

水越 晴子

ソーダ水部活終わりの一気飲み

京都府宇治市

椎原 園美

入選

午後の陽や燃ゆるカンナに三味響き

すすき野や貨物列車の埋もれゆく

毬爆せて笑ふ三粒の栗の貌

拝観料払ふ小窓に初しぐれ

経読めば庭の銀杏地をたたく

畦道は彼の世入口死人花

山霧の坂下りる影登る影

冬の雨キネマのあとにそつと降る

幾つから長寿というや芋あらう

棟上げの封印解くる今年酒

小鳥来る終の栖に母一人

菰樽の積まれし大社小鳥来る

赤とんぼ群れて棚田に人の声

宇宙語のやうな数式夜長し

秋の田の風に一村動ぐごと

選者吟

結界は棒の一本穴まどひ

大垣市

林 みき子

不破郡垂井町

野々部 節子

安八郡輪之内町

野村 照子

不破郡垂井町

児玉 昌巳

大垣市

安田 隆子

大垣市

高津 喜久子

大垣市

森田 和子

埼玉県所沢市

坂井 傑

大垣市

早苦 千恵子

兵庫県神戸市

岡田 幸子

京都府京都市

石田 吉之助

神奈川県相模原市中村

光枝

三重県四日市市

藤田 勝民

大阪府堺市

棕本 望生

さち子



一般の部